

ナルシズムと〈他者〉

1 問題設定

本稿は、フロイトのナルシズム (Narzismus) 概念を超自我 (Überich) との関係において整理し、この概念の射程を新たに捉えなおす試みである。他の多くの精神分析概念と同様、ナルシズムという言葉も、もはや一般的な用語と化した感がある。「社会の心理学化」とも呼ばれるこのような傾向⁽¹⁾によって曖昧に多用されることにもなった概念を、フロイトのテクストを厳密に解釈し直すことで再構成し、この概念がいまだ豊かなポテンシャルを持っていることを示したい。

ところで、ナルシズムという言葉自体は、ナルシス神話の例を待たず、またフロイト自身が『ナルシズム入

比 嘉 徹 徳

門』(一九一四)でP・ネッケ (P. Naecke) を心理学的用語としての先行的使用例として言及しているように、フロイトのオリジナルではない。また、一般的な使用において、ナルシズムは病的もしくはネガティブな意味で用いられることが多いように思われる。それに対して、フロイトにとってナルシズム概念は、それが人間にとって不可欠であるという以上の重要な意味を持っている。以下で見えていくように、フロイトのナルシズム概念の独自性は、自己愛の核には根源的な他者性が刻まれているということ、そして、自己は自身が他者である限りにおいてそれを愛することができるというパラドクスにこそある。さらに、これに加えてもうひとつの、反対の方向性がフロイトによって示されている。フロイトの対象選択論(人は愛の対象とし

て何を選択するかについての考察)をたどっていくと、今度は、自己が対象を愛するのは、その対象の中に他ならぬ自己を見出すからだ、とフロイトは説明している。この二つの論点は、別々のことではなく、緊密に結びついており、超自我による自己の象徴化という契機がこれに関わっている。

われわれの議論は、ナルシズム概念のフロイト理論における決定的重要性を強調したラプランシュの議論に多くを負っている。本稿がこれに加える論点は、ナルシズムがそれから最も遠いように思われる超自我と深い結びつきを持つているとフロイトが考えたこと、その意味を明らかにする点にある。すなわちそれは、ナルシズムとしての自己愛の核には超自我という他者のメッセージが刻まれているということ、また、自我にとっての他者たる超自我の(ひとつの)源泉はナルシズムである、というフロイトの興味深い理論構築に関わる。このことはあまり強調されてこなかったように思う。

このように本稿の関心は、フロイトのナルシズム概念と、それに密接に関わる超自我という他者を、そのパラドキシカルな核心において素描することにある。ここで全面

的に展開することはできないが、本稿はセクシュアリティやジェンダーに関してもフロイト理論との関係で若干触れておきたいと思っている。この点を含めて、九〇年代以降のジェンダー研究において大きな影響力を持つジュディ・バトラーによるフロイトのメラニコリー論解釈に言及することが有益であると思われる。バトラーのメラニコリー・ジェンダー論においても、他者が鍵概念となっている。詳細は次節に譲るとして、われわれがバトラーに批判的に言及するのは、同じフロイトの読解から次の点に関する相違を引き出すことで、われわれの議論の利点を明確にするためである。

それは、フロイトが同性愛を初めから抑圧され、失われる運命にある「メラニコリーの対象」と見なしているというバトラーの読解に関わっている。それは、フロイトの理論が異性愛主義的であるという通説を追認する形で論じられているのだが、このような見解が、ナルシズム概念を見ない限りにおいてのみ可能な見解であることを示す。バトラーによれば、同性愛的対象は、異性愛者にとって、初めから愛されたことがなく、したがって失われたことさえ気づかれない(二重に否定された)メラニコリーの他者で

ある。この主張は、自我が、愛することを断念した他者への同一化、捨てられた対象備給の痕跡からなっているという『自我とエス』の一節を捉えてのものである。しかしその議論は、フロイトの第二局所論（超自我／自我／エス）のうち自我（と性格）をのみ論じるもので、超自我の問題圏が抜け落ちてゐる。なによりその理解では、フロイトが「われわれの存在の核（der Kern unseres Wesens）」（『夢判断』）と呼んだ、主体の固有性の領域が理解されないだろう。さらに、バトラーがフロイトから読み取るメランコリーの他者は、単に排除された他者に過ぎない。それは、フロイトが論じた、主体に「謎」をかけ、欲望を喚起する、自己に相関的で差し迫った他者の様態を捉えていない。

最後に、『ナルシズム入門』における論述の過程を追いながら、フロイトのメタ心理学の位置づけについても若干の示唆を行ないたい。そのことによって、フロイトの思想が、一九世紀の経験科学なそれでもなく、あるいはまた素朴な思弁でもなく、徹底して転移（Übertragung）という現象のもとで展開されていることを示す。

2 メランコリーの他者——バトラーのフロイト読解

バトラー版メランコリー論は、同性愛の「先天的（pre-empive）」な排除が異性愛主義を構築するメカニズムを、独自のフロイト解釈において提出している。バトラーによれば、エディプス・コンプレックスは近親姦タブーだけでは機能せず、同性愛タブーを常に伴っている。男児における母親への愛の断念は、近親姦タブーという文化的執行者たる父親との、母親をめぐるエディプスのドラマと去勢不安の効果ではない。むしろそれは、男児が「女性化」して母親と同性愛的に結びつくことへの厳しいタブーによって生じるのだ⁽²⁾という。では、同性愛のあらかじめの喪失はどのように生じると考えられているのか。バトラーは、フロイトのメランコリー論からその着想を得ている。

よく知られているように、フロイトはメランコリーを喪（Trauer）〔悲哀〕と比較することによって論じている。愛する対象の喪失による苦痛は、残された者が、自らの自我をその失われた対象に同一化することによって保存し、一時的に耐えうるものとなるとフロイトは説明している。不在の対象の代わりに、自我が自らその代理を買って出る

という訳である。別離に耐えられないために、自我は愛する対象を取り込み(それに同一化して)他者を一時的に自我のうちに保存する。この取り込みは、喪においても、そしてメランコリーにおいても共通の防衛機制であるとフロイトは考えている。ただ、喪がいつか明けるのに対して、メランコリカーは終わらない悲哀を生きている(Freud [1917:199])。喪に服している者が、自我に取り込まれた他者の似姿ではなく、再び新たな現実の対象に向かうのに対して、メランコリカーは失われた他者との絆をいつまでも絶つことができない。つまり、メランコリカーは愛する他者の喪に失敗しているのである。バトラーによれば、これと同様のメカニズムが、異性愛が支配的な社会において作動しているという。異性愛者は、自らの内なる——もはや死んでしまった——同性愛的他者に憑かれている、ジェンダー・メランコリカーである。

バトラーは、フロイトの『自我とエス』(一九二三)の次のような箇所から、体内化(取り込み)のメカニズムの根源性を読み取っている。「同一化は、そもそもエスがその対象を断念する条件なのかも知れない。」(Freud [1923:297])⁽³⁾あるいは「自我の性格は、対象選択の歴史を含む

断念された対象備給の沈澱物 (ein Niederschlag) である。」([ibid.])主体が異性愛者になっていくとき、同性の対象への愛着は、同性愛タプーの社会的言説を通じて断念され、同時に、自我の死んだ古層として体内化される、とバトラーはいう(バトラーは、棄却しつつ保存するこの動きを、「端的に」「止揚(Aufhebung)」と呼んでいる(Butler [1997:176])。このようにバトラーのメランコリー論は、対象備給を体内化によって代償するというフロイトの自我形成論を拡大し、ジェンダー論的に応用したものである。すなわち、対象選択において同じジェンダーを持った存在を選ぶことが社会的にあらかじめ禁じられているが故に、それは体内化へと転じるという論理を駆使している。この体内化が、自我に男性性/女性性といった特性を与え、さらには、「ストレートな」性的指向をつくるのだ、と。⁽⁴⁾

しかし、ジェンダー分割によるこのような通りのよい議論が可能になるのは、バトラーがフロイトのナルシズム概念を見ない限りにおいてであろう。同性愛(的对象)が、メランコリーの対象であるということは、少なくともフロイトのテクストから直接導けることではないといわなければならない。というのも、フロイトは、同性愛を初めから

断念されるべきものと考えた訳ではないからだ。またパトラーにおいて他者は、われわれが以下で見えていくフロイト的なその豊かな可能性を取り逃がして、他者を自我の単なる構成要素へと貶めている。自我が他者——パトラーにおいては同性愛的他者——から成っているという一見ラディカルな主張は、その実、自我の位相の安定性を一度も疑ってはいない(パトラーにおいて超自我は、異性愛主義的言説という「ひとつの」声であり、それによって自我は安定した場所を与えられている)。その反対にフロイトのナルシズムからわれわれが見るのは、(パトラーとはまったく異なる意味での)主体の他者への全面的な依存性であり、決して自我に回収されない超自我という他者の様態だからである。同性愛とメランコリーの他者についての論述はここまでにして、以下では、一見まったく関わらないように見える他者とナルシズムが、フロイトにおいては深く結びつけられていることを見ていく。

3 ナルシズムと〈他者〉

フロイトのナルシズム概念は、一般に抱かれがちな觀念、つまり、ナルシズムとは自己像への病的な愛着であ

り、他者の視線を欠いている云々とは異なっている。それはフロイトにとって、せいぜい「二次ナルシズム」をしか意味しない。他方、一次(＝原初的)ナルシズムは、他者を組み込んだ運動そのものを指している。そこから私自身が見られ判断されるところの、他者の審級の設立と、それを通じて主体が象徴化される過程である。

ところで論点を先取りしてしまうと、フロイトによれば、主体がある対象を愛するのは、それが自己そのものと感じられるからなのである。ただ、その愛される自己とは、象徴的な他者に見出された限りでの自己である。ところが、主体に呼びかける象徴的な他者(以下では、個別の他者とは区別して〈他者〉と記す)のメッセージが二重であるために、自己の象徴化——「私」がいかなる存在である(ベキ)か——が完遂することではなく、そこには常に解読できない残余が生じる。以下では、はじめに「対象選択」の点から、次に「自体愛」との関係において、三番目に「超自我」との関わりにおいて、フロイトによるナルシズム概念を検討していこう。

3.1 ナルシシズム型対象選択

『ナルシシズム入門』(一九一七、以下『入門』と略記)で、フロイトは対象選択に二つのタイプを挙げている。ひとは「依託型 (Anlehnungstypus)」と呼ばれる対象選択であり、他方は「ナルシシズム型 (Narzisstischtypus)」なそれである。依託型対象選択は、「養育や、世話、幼児の保護に携わる人が最初の性的対象となり、したがって当分は母親やその代理人がそれに当たる」ようなタイプの対象選択である (Freud [1917: 54])。他方、ナルシシズムの対象選択は、「リビドー発達に障害を被ったような人々、例えば倒錯者だとか同性愛者の場合とりわけ顕著なのだが、彼らは成長後の愛の対象を母親というモデルによってではなく、彼ら自身の人格に従って選択して」おり、「彼らは明らかに自分自身を愛の対象として求めており、ナルシシズム的と呼ぶべき対象選択のタイプを示す。」(Ibid.) のようにフロイトは、ナルシシズム型が、リビドー発達に「障害」を被っており、「倒錯的」であると示唆している。ところが、依託型についてのフロイトの説明は、次に見るように、常にナルシシズム型対象選択の優位を確認する結果となっている。

人間は二つの根源的な性対象を持つ。すなわち、自身と世話してくれる女性であるが、最終的にはその対象選択において優勢的に表出される、一次的ナルシシズムを前提にしているのである。(Ibid.) 強調引(用者)

フロイトがナルシシズムに優位を認めていることがわかるもうひとつの箇所を示そう。『入門』においてフロイトは、依託型対象選択の特徴を「性的対象の過大評価」であると説明している。この過大評価は、対象への「惚れ込み (Verliebtheit)」に起因しており、対象への過大なりビドーの備給と自我リビドーの貧困化を生じさせるといふ。ここで次のように少し一般的に問うてみよう。一体、なぜ主体は対象に惚れ込み、熱狂してしまうのだろうか？ 意外なことに、フロイトはその理由を性差によっては説明していない。主体が対象を性的に過大評価するのは、自分と異なるジェンダーを持つからではなく、また、男性性と女性性の相補的な関係という異性愛主義の論理によってでもない。惚れ込みは、主体が対象に(奪われた)自己自身を見出すことによって生じるとフロイトは論じている。「完

全な対象愛は、子供の根源的ナルシズム (ursprünglichen Narzismus) に完全に由来しており、それ故、性的対象への転移自体に相当している、目立つ性的過大評価を示している。」([ibid.: 55]) ここでフロイトは、対象愛を自己愛(ナルシズム)の変形として読み取っている。対象が愛されるのは、フロイトによれば、それが自己自身と受け取られるからなのだ。フロイトのナルシズム概念について、ラプランシュは次のように述べている。「したがって、エロスの情熱的盲目は、『…』フロイトにとって、あらゆる愛情関係において現存するナルシズム的要素を否定しがたく決定的な痕跡である。」(Laplanche [1984: 78]) さらに、このナルシズムの作動には、象徴化という「切断」が関わっているとわれわれは考えている。ここでいう象徴化は、自己を対象化し、何者かとして同定することである。そして「切断」とは、超自我という〈他者〉から主体が見られること、そして、他ならぬ主体自身があるような〈他者〉の場所に立って自分を見るという特異な契機を指す。ナルシズムにいかにか〈他者〉が関与しているのかを以下で見たい。

3.2 対象の「再発見」

フロイトは、『入門』で、ナルシズムのプログラムを、自己愛 (Autoerotismus) の喪失から始めている。それは簡単にまとめると、次のように表現されている。性欲動ははじめ自我欲動に依託されており「寄りかかっており」、後にそこから独立する (Freud [1914: 54])。つまり、「最初の自体愛的な性的充足は、生存にとって不可欠で自己保存に役に立つ機能に関連して体験されるのだが、その自己保存・生命維持機能に関連した対象が、その後、あらためて性欲動の備給先・性的対象として見出されるのである」([ibid.])。自体愛的な対象の喪失に続いて、それがナルシズムの機制を通じて「再発見」される、というのがフロイトの説明である。

自己愛については、『欲動とその運命』(一九一五)における記述が簡便なので、それを参照しよう。個体にとって、自己愛の状態——自我(私)はいまだ存在しない——において、対象(ならびに外の世界)は基本的に無関心なものである。他方で、快をもたらす対象は「快—自我 (Lustobjekt)」と取り連えられる。重要なのは、自己愛においては「快—自我」としての対象しか存在せず、両者の根本的な

取り違えが生じている、というフロイトの想定である。のちに対象が快の源泉だとわかると、その対象は愛される。しかしそれが自我に組み入れられると、純化された快—自我にとって対象は再び見知らぬもの、もしくは憎まれるものと一致してしまう。」([1915:98])このように、対象はまだまだ通常の対象としては認識されていない。対象は無関心なものにしておかなければ、何か耐えがたい不快や不安の源泉であると、フロイトは示唆している。⁽⁷⁾

そこへ、本来の(性的)対象が「回帰」してくる(これは「自我欲動に続いて性欲動が現れる」ということのいい換えである)。「セクシュアリティ3論文」(一九〇四)の次の一文が、この過程に関わっている。「対象発見は、本来再発見(Wiederfindung)である。」([1904:126])。「再発見」が意味するのは、対象は一度喪失されたということである。注意すべきは、喪失された対象とは「快—自我」に他ならないということである。「再発見」ということで、フロイトがひとつの「切断」を論じていることにわれわれは気付くだろう。この切断には、自己を対象化し、〈他者〉の次元でそれを登記すること、つまり象徴化が関わっている。換言すれば、ここには、主体が〈他者〉の側

から自己自身を見出すという特異な契機が含意されている(この特有の〈他者〉、超自我については次節で論じる)。したがって、フロイトのいう対象とは、既に失われた(自体愛的)対象の代理なのであり、それに置き換えられた対象を指している。このことから理解されるのは、「ナルシズム型対象選択」が意味するのは、「再発見」される性愛の対象が「快—自我」の代理に他ならない、ということである。すなわち、喪失した対象⇨「快—自我」の場所に、性的対象が「再発見」される。『喪とメランコリー』でフロイトは、自我には愛する対象の「影(Schatten)」が落ちていと述べていた([1917:202])。ナルシズムの文脈から見直すと、むしろ反対に、主体は、対象に自分自身の「影」を見いだすが故に、熱狂するのである。

3.3 〈他者〉の二重性

既に喪失された「快—自我」の場所に、愛する対象を「再発見」すること、それはいかにして可能となるのか? それは、〈他者〉(の視線と声)を通じてである。この〈他者〉にあたるのが、超自我と呼ばれる審級(Instanz)である。超自我という〈他者〉は、(1)自我にとっての理想を

意味し、同時に、(2)自我に相関的でありながら、最終的に謎のままに留まるような〈他者〉である(すなわち、そのメッセージを汲み尽くすことができない)。順番に見ていこう。

(1)フロイトによれば、超自我とは、自我にとっての理想(≡自我理想(Teichideal))を意味しており、その理想に照らして自我は自らを計測し、律する(そして自我理想は、抑圧の前提でもある([1914:60])). 超自我は、自我に命令し、ときに自我に「有罪宣告」を下す〈他者〉である。問題なのはしかし、その内容と同時に、フロイトがどこにその起源を置いているか、である。

『自我とエス』で、フロイトは、超自我を最も古い同一化の痕跡であると述べている。フロイトにとってこの同一化は、自我理想の萌芽であり、後につくられる自我や性格によっても抵抗しえないような力を持っているとされる。すなわちそれは、個人の性格が(ある程度)変えられるという意味での可塑性を持っておらず、それを超越した持続的な力で主体を拘束している(Freud [1923:298])。この最古の同一化の説明に、フロイトは「父親」と「脱性化」という言葉を用いている。「超自我は、父親像との同

一化によって生じる。このようなあらゆる同一化は、脱性化の特性を持ち、あるいは、それ自体昇華である。」(Freud [1923:321])⁽⁸⁾「父親」はここでは普遍的な規範(端的にはエディプス・コンプレックス)を表現している。そして「脱性化」とは、欲動にあると仮定された、性的で生命の維持に向かう傾向(生の欲動)を分離し取り除いて(≡脱混合(Entmischung)し)、攻撃的で破壊的な傾向(死の欲動)が残ること意味している。「この分離から、理想はそもそも命令的な当為の、厳格で残酷な特徴を獲得するのである。」([Ibid.])

とはいえ、この説明だけでは、次のような疑問が残る。すなわち、いかに超自我が自我に対して「かくあれ」と厳しく命令するとしても、それが単に外在的な〈他者〉であるなら、それは自我にとってそれほど切迫した声とはならないだろう(必ずしもその命令に従わなければならない理由がない)、という疑問である。フロイトは、超自我にもうひとつの起源を与えることで、この問いに答えている。フロイトによれば、超自我という〈他者〉のもうひとつの源泉こそナルシズムなのである。「ひとが」彼の理想として投影しているものは、彼の幼児期の失われたナルシシ

ズムの代理である。幼児期においては、自分自身が自らの理想であった。」([1914:61]) つまり超自我の要請は、他律的な命令に服することのみならず、全能であったナルシズム的な理想を再現することでもあるのだ。したがってフロイトは、超自我という〈他者〉に、対立するようなたつの特性を与えていることになる。一方で超自我は、最初に父親(両親)やそれに代わる指導者的な立場の姿ともなっており、第三者的で普遍的な当為、すなわち、誰にでも万遍なく該当する規範や道徳を自我に押しつける。他方で、超自我は、幼児期の完全性、原初的ナルシズムの代理でもあるために、その命令は、特殊に私にのみ適用されるものとなる。そのことによって、超自我という〈他者〉は、単に道徳的に厳格であるだけでなく、自我に対して相関的に「親密な」〈他者〉ともなる。

(2)このような超自我の起源の二重性⇨曖昧さのために、そこから発せられるメッセージは、それを受け取る主体にとって、不可避に曖昧さを帯び抽象化されることになる。フロイトは、超自我の命令が曖昧なだけでなく、究極的には遂行不可能な命令であることを、「父のようであれ」かつ「父のようであってはならない」というダブル・バイン

ドの形で提示している([1923:302])。われわれは、超自我の命令の二重性を、ここでは父親という形象にこだわらずに、フロイトが超自我に二つの起源を想定したことに由来するものとして理解しておこう。〈他者〉によって、自己は初めて自らを対象化し象徴化する——〈他者〉に自分がどう映るのか反省する——のだが、そのメッセージの二重性によって、その解読は完遂することがない。いい換えれば、象徴化は、常に不完全なものに留まるしかないのだ。ここで重要なことは、ナルシズムが、自己の象徴化の契機であるとともに、同時に、象徴化の限界をも意味しているということである。「私」がどうあるべきか、〈他者〉は「私」に何をすることを欲しているのか、私にはついに理解することができない⁽⁹⁾。このような逆説に、フロイトの超自我、他者論の可能性がある。

4 メタ心理学…メタ「転移」は存在しない

ここまでフロイトのナルシズム概念が、特殊な他者、すなわち超自我とそれによる自己の象徴化に関わることを見てきた。最後に、フロイトが自らの理論的営為をどのよう限定しているかについて、ナルシズムについての記

述に即して触れておきたい。

繰り返せば、主体は対象に自己の完全な姿を見いだすが故に惚れ込むのだった。ナルシズム型対象選択に関連して述べられた「惚れ込み」という表現は、精神分析の重要概念である転移 (Übertragung, transference) の概念に直接関わっている。転移とは、分析家と患者の情動的結びつきであり、その中で／それを通じて精神分析は進行していく。ここでは「惚れ込み」という表現に、転移における情動面と関係の「構造化」(Lacan [1978:124]) としての側面、その両方を含意させておきたい。さて、惚れ込みがナルシズムによって駆動されているとして、ではどのようにしてフロイトは、一次ナルシズムを基礎づけるのだろうか？ もしそれが、人間は何の欠損もなく完全に充足していた原初状態を目指す傾向があるという生物学的仮定に過ぎないのなら、本質主義的な疎外が主体を条件づけているというだけの話になってしまう。結論からいえば、フロイトは原初ナルシズムを基礎づけないし、根拠づけない。だがこれは、理論的不備ではない。むしろ、根拠づけないことが、フロイトが精神分析の実践、転移という現象のもとに理論構築したことを証拠づけている。

フロイトはナルシズムを論じるにあたって、直接的観察には限界があり、他の観点からの「帰納的推論 (Rückschlus)

が、より容易であろうと展望を述べている ([1914:57])。しかしこれは、フロイトが『入門』の冒頭で述べた方法論を自ら撤回していることを意味しているのである。フロイトは、自我リビドーや対象リビドーといった概念が、精神分析の理解を難しくし、さらに思弁的な傾向さえもたらしていると述べ、自分が依拠するのはやはり経験的な科学の方法である、と述べていた。「思弁的」諸理念は、すべてが依って立つ科学の土台ではない。土台はむしろ観察のみなのだ。」([ibid.:54]) このように冒頭で述べておきながら、一次ナルシズムを論じるにあたって、フロイトは、精神分析が記述しようとする領域が、経験科学のそれとは別のところにあると(フロイト自身の科学への意志にもかかわらず)方向修正しなければならぬのだ。「別のところ」とは、転移という空間に他ならない。

フロイトによれば、ナルシズムとは、仮定された完全性(全能性)という幻想である。よって、幼児の一次ナルシズムは、観察によって確かめられることでも、また、生物学的前提でもない。それは例えば、両親のその子供に

対する振る舞いから、事後的に導き出される幻想、すなわち転移の結果として論じられる。子に対する親の愛情細やかな態度(自分の子供に完全性を見ようとする「強迫(Zwang)」)は、親が自身の幼児期のナルシズムを再現し、投影していることによるのであり、子供に完全性を見ようとする親のナルシズムの再活性化である、とフロイトはいう。さらに、事態はあたかも愛する対象に自らのナルシズムの完全性が「奪われている」ことによって生じているように見えるが、フロイトが示すのは、それこそ転移の結果であるということなのだ。もう少し説明が必要であろう。

ここまでわれわれが確認してきたのは、フロイトにとつてナルシズムが、性愛の、というよりむしろコミュニケーションの基底にあるということだった。ところが、そのナルシズムそのものの説明にあたってフロイトは、それを根拠づけるどころか、ナルシズムとは仮定された完全性という幻想に他ならないのである。いかなる欠如もない理想的な存在や、自らの存在を享受している対象を想定すること。人がそのような対象を想定するとき、既に転移は生じている。転移という現象から、一次ナルシ

ズムは過行的に構成される。つまり、一次ナルシズムは、転移の原因ではなく結果である。

同じ事態を、ラカンはフロイトとは反対側から記述することで、そこに「欲望」というラカン独特の論点を加えていると見なすことができる。親の側から語りかけられ、ナルシズムを投影された幼児の側に生じるのは、次のようなひとつの「問い」であるとラカンはいっている。

「彼(女)は、私に話しかけることで、何を欲しているのか?」(Lacan [1978:214]) ラカンによれば、この〈他者〉の呼びかけを欲望として、そして自らへの「問いかけ」として引き受けるとき、象徴化が既に生じている(ラカンは、幼児にとつての、この「問い」の理解しがたさを「欠如(manque, lack)」と呼ぶ)。

これをわれわれの文脈に置き直してみよう。自我理想のひとつの源泉は、フロイトによれば、幼児のナルシズムであった。しかし、幼児的ナルシズムは、例えば親のナルシズムの投射であり、〈他者〉の欲望の(事後的)表現であった。したがって、主体が超自我Ⅱ自我理想の命令として「回復」しようとしている最も根源的なナルシズムが、そもそも〈他者〉の欲望に対する反応——〈他者〉

は何を欲しているのかという問いに応答すること——から構成されていることになる。そして、この問いの解説は、既に確認した理由から完了することがない。再びここから帰結されることも、自己愛の核には根源的な他者性が刻まれているというフロイト的ナルシシズムの論理に他ならぬ。

竹村（一九九八）によれば、フロイトのメタ心理学とは、異性愛主義的・生殖主義的なセクシュアリティの発達論を予定調和させるための理論装置でしかないという。しかし確認してきたように、フロイトにとって転移の上位概念は存在しない。つまり、転移そのものを、個体が快感を求めることの自明性や異性愛の自然性といったイデオロギーに帰属させることを、フロイトはしていない。フロイトは、メタ心理学という理論的営為を転移という枠内に限定しており、転移の「メタ」は、フロイトにとって論じうるものではない。⁽¹⁰⁾ここから推論されるのは、例えばエロスでさえ、転移についてのひとつの解釈でしかなく、その逆（エロスによって転移⇨コミュニケーションが生じる）ではないということである。

以上見てきたように、フロイトにおけるナルシシズム概

念は、その内容において新たな解釈の余地があるというだけではない。フロイトの他のテクストにおいてもそうであるように、その記述のレヴェル・方法においても、フロイトが直面した精神分析固有の困難と、そして可能性とを示すものである。

(1) 櫻村愛子（二〇〇〇）を参照。

(2) Butler [1990 = 1999: 117]。また、小倉千加子（二〇〇一）による、バトラーのメランコリー・ジェンダーの簡潔な整理を参照。

(3) バトラーの引いた英訳標準版では、同一化が、「唯一の条件」(the sole condition)となつているのに対し、独語全集版にあるのは、「総じて、一般に」の意の“überhaupt”であり、ニュアンスが異なっている。

(4) 「ストレートな」男性／女性は、彼らが決して愛さなかった男性／女性に自らが「なる」。したがってバトラーによれば、異性愛者は、愛したことがなく、したがって、それを断念したことにも気付かない、死んでしまった同性愛的対象⇨死者に憑かれ続けている (Butler [1997: 147])。ラCapra [1999 = 2000] は、バトラーのメランコリー論を「喪失を歴史的ではなく存在の本質で

あると考え、不在と混同するという、長く続いてきた物語の最新型のよい例である」として批判している。本稿もラプラのいう意味での歴史性に欠いているかもしれない。

しかし、失われたものが何であるかすら不明なメランコリーの喪失に、バトラーが同性愛的なものをあてはめるのに対して、本稿は喪失が事後的であり、かつそれが最終的に明らかになることも決していないことを以下で示す。

(5) この区別に従えば、バトラーが扱ったのは「依託型対象選択」のみである。

(6) 「自己自身」という表現は、まだ正確さを欠いている。この点に関して、(愛される)「自己」の象徴化がそもそも〈他者〉のメッセージの読み取り(とその不可能性)に依拠していることを、「33」で超自我に関連して論じる。

(7) 「憎悪は、対象への関係としては、愛よりも古い。憎悪は、ナルシズムの自我の側からの、刺激を与える対象への原初的拒絶に由来している」とフロイトは述べている(Freud [1915:101])。しかし同時に、自我がもともと対象に同一化したものである以上、対象への攻撃性としてのサディズムは、自我への攻撃性としての原初的マゾヒズムをも含意する。この点に関して、ベルサーニ(Bersani [1984=1999])によるセクシュアリティ論(とりわけ第4章)を参照せよ。さらに、ベルサーニ(Bersani [2000])

は、「饜宴」の読解を通じて、欲望を差異や欠如によって誘発されるものではなく、同質性とナルシズムの線からたどろうとしている。

(8) 同論文の別の箇所(Freud [1923:299])の註内では、原初的同一化を「父親」に限定せず、「両親(Eitern)」に同一化するとも述べている。この点について、Boch-Jacobson [1994]を参照。ヤコブセンは、前エディプス期の「感情の結びつき」は、性差をとまなわれない、同性愛的でも同性愛的でもない同一化であるとし、さらに、性的規範の受け入れ(=社会化)であるところのエディプス・コンプレックスの動因を再び同一化に求める。しかしこの説明では、(以下に見るように)超自我の同一化不可性という問題が抜け落ちることになる。

(9) このように〈他者〉の要請が——その起源の二重性によって——何であるかが最終的に不明瞭であっても(あるいは不明瞭で遂行不可能であるからこそ)、主体は自らその行為を決断し選択しなければならぬ。おそらくフロイトにとって、主体の自由とはこのような拘束の中における行為を指している。この点については、稿を改めて考えたい。

(10) ここでの本稿の記述が、馬場靖雄のルーマン論から多くの示唆を得ていることを記しておく。特に以下の箇所。

「転移が何によって可能になるのか（いかに説明をれらるか）と問うてはならない。コミュニケーションは、例えば問主観性といった何ものかによって支えられて成立する訳ではなかった。同様に、そもそも何かによって転移が可能になるわけではない。『個人』を超越する何かがある。[...]可能になるとしたら、それは転移ないしコミュニケーションによって成るのではなく、その逆ではない。」(馬場 [2000 : 87-88])

参考文献

馬場靖雄 二〇〇一、『ルーマンの社会理論』勁草書房
 Bersani, Leo 1983, *Theorie et violence: Freud et l'art*. = 一九九九年、長原豊訳『フロイトの身体：精神分析と美学』青土社
 —— 2000, "Sociality and Sexuality", *Critical Inquiry* 26 (Summer 2000), 641-656.
 Borch-Jacobsen, Mikkel 1994, "The Oedipus Problem in Freud and Lacan", *Critical Inquiry* 20 (Winter 1994), 267-282.
 Butler, Judith 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, N.Y. & London, Routledge. = 一九九九年、竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』青土社

—— 1997, *The Psychic Life of Power: Theories in Subjection*, Stanford University Press. (『現代思想』(青土社 二〇〇〇/二二) 七一巻より四章の日本語訳がある)

Freud, Sigmund 1905, *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*, Fischer Verlag GmbH, Studienausgabe, Bd.5.

—— 1914, *Zur Einführung ins Narzissmus*, Sa. Bd.3.

—— 1915, *Trieb und Triebchicksal*, Sa. Bd.3.

—— 1917, *Trauer und Melancholie*, Sa. Bd.3.

—— 1923, *Das Ich und das Es*, Sa. Bd.3.

(訳出に際しての「ノロイ」『自我論集』『エロス論集』(中山元訳、さくま洋文庫)を適宜参照した)

藤村和子 二〇〇〇、『社会の心理学化』と臨床社会学』『愛知大学文学論叢』122 : 1-22

Lacan, Jacques 1978, *The Four Fundamental Concepts of Psychoanalyse*, trans. Alan Sheridan, New York: Norton.

LaCapra, Dominick 1999, "Trauma, Absence, Loss", *Critical Inquiry* 25 (Summer 1999). = 二〇〇〇年、村山敏勝訳『エロスと不在』『喪失』『みます』第四七〇号、四七一号

Laplace, Jean 1985, *Life and Death in Psychoanalysis*, trans. Jeffrey Mehman, Johns Hopkins University Press.

小倉千加子二〇〇一、『セクシュアリティの心理学』有斐閣

竹村和子一九九八、『愛について』『思想』岩波書店、876:

5-23

二〇〇三年三月二〇日受稿

二〇〇三年五月二七日レフェリーの審査
をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)